要旨

戦後日本における『ロビンソン・クルーソー』の受容
―畑耕一による翻訳児童文学版を中心に―

劉　岑

ダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）によって書かれた『ロビンソン・クルーソー』は 1719 年に発表されて以来、世界中で数多く翻訳されている。18 世紀の後半に、イギリスにとどまらず欧米各地で子供むけの読み物として翻訳されるようになった。日本への翻訳児童文学版と言えば、1899 年（明治 32）に巌谷小波が『ロビンソン・クルーソー』を『世界お伽話』の中の一冊として翻訳したのが最初の子供向けの翻訳版である。それ以来の数多くの翻訳版をめぐる研究は主に明治期のものに絞られており、戦後 10 年間の『ロビンソン・クルーソー』翻訳ブームが出てきた時期にまつわる研究はまだ少ない。本稿はその時期の 1950 年（昭和 25）の畑耕一による翻訳版を研究対象として、主にロビンソン像、物語の論理性や宗教的要素に着目しながら、原作との比較を通じることで、戦後日本における『ロビンソン・クルーソー』の受容の一例の様相を検討することを目的とする。

Abstract

The Adaptation of *Robinson Crusoe* in Postwar Japan: Focusing on the Translated Children's Literature Edition by Koichi Hata

Cen LIU

Robinson Crusoe, written by Daniel Defoe (1660-1731), was first published in 1719 and has continued to be translated throughout the world. In the latter half of the 18th century, the book was translated as a children's novel not only in England but also in other countries of Europe and the United States. As to the Japanese translation for children in Japan, *Robinson Crusoe* by Sazanami Iwaya in 1899 in Sekai Otogibanashi series was the first edition. Research on the numerous translated editions has mainly focused on the Meiji period, and there is still little research on translations in the decade of postwar, when the translation boom of *Robinson Crusoe* emerged. The purpose of this paper is to examine an example of the adaptation of *Robinson Crusoe* in postwar Japan by Koichi Hata (1950), by comparing it with the original novel, mainly focusing on the image of Robinson, the coherence of the story and plots about religion.

戦後日本における『ロビンソン・クルーソー』の受容

―畑耕一による翻訳児童文学版を中心に―

劉　岑

1. はじめに

本稿は、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731: 以下デフォーと略称する）によって書かれた『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*, 1719-1720: 以下『ロビンソン』と略称する）の畑耕一（1886-1957: 以下畑と略称する）による翻訳児童文学版に焦点を当て、ロビンソン像や物語の論理性及び宗教的要素に着目しながら考察し、原作との比較を通じることで、『ロビンソン』の戦後日本への受容の一例の様相を検討することを目的とする。

まず『ロビンソン』という小説の内容を簡単に説明したい。主人公であるロビンソンは幼い頃から放浪癖があり、両親の忠告を聞かずにひたすら自分の意地を通して海に出る。数回の航海を経験した後、アフリカに奴隷を求めに行く途中、海難に遭ってただ一人で無人島に漂着し、独力で島での生活を築く。彼は漂着してからおよそ 15 年後、海浜で他者の足跡を発見したことを機に島での平穏無事な生活が一変する。ロビンソンはその足跡が隣の島々に住む先住民のものであると突き止める。その後、ロビンソンは捕虜として危うく食べられそうになる先住民の一人を助け出し、フライデーと名づけて英語を学ばせ、聖書を読ませ、従僕に仕立てる。そうした共同生活を暮らしてから 10 年後、ロビンソンは乗組員の反乱に遭って孤島に連れられてきたイギリス人の船長らを救い、彼らと一緒に船を取り戻して 28 年ぶりに帰国する。

『ロビンソン』という小説について、いくつか確認しておかなければならないところがある。一点目は、その原作は三部から構成されているという点である。人々によりよく知られているロビンソンの無人島での物語は第一部の『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』（*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719）で、第二部と第三部はそれぞれ『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』（*The Farther Adventures of Robinson Crusoe*, 1719）と『ロビンソン・クルーソー反省録』（*Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson*

Crusoe, 1720）である[1]という点である。上の段落の内容は第一部の粗筋で、本稿で取り扱う畑訳も第一部の抄訳である。二点目は、『ロビンソン』が 1719 年に初めて出版されて以来、世界中で数多く翻訳され、18 世紀の後半になると、イギリスだけでなく欧米各地で子供むけの読み物として翻訳されるようになった（佐藤和哉、220）ことである。1899 年（明治 32）に巌谷小波は『ロビンソン』を『世界お伽話』の中の一冊として翻訳した。それは『ロビンソン』の日本最初の子供向けの翻訳版である（私市保彦、232）。国立国会図書館国際子ども図書館のデータベース（https://www.kodomo.go.jp/）を検索すると、再版を含んで、翻訳児童文学としての『ロビンソン』は 108 件が出てくる。

本稿で焦点を当てるのは昭和 20 年代という『ロビンソン』の戦後の翻訳ブームが現れた時期における畑耕一の翻訳版である。国際こども図書館によると、戦後 10 年間に出てきた翻訳児童文学版の中に、再版を含んで、全部で 30 版がある。それらの翻訳版の中に、畑訳は二十章から構成され、1950 年（昭和 25）に『ぎんのすず』を発行した広島図書による「銀の鈴文庫」の一冊として刊行された。訳者の畑耕一は小説家、評論家と劇作家として戦前から多くの作品を発表し、疎開のため安佐郡可部町（現広島市安佐北区）へ移った後、余生をそこに送っていた。第二次世界大戦が終わった後、彼は文芸復興と広島の郷土文化に力を尽くした人物として知られている。1947 年（昭和 22）9 月 12 日付けの知人の四宮美智子に宛てた葉書の中で、畑は「とにかく、郷土広島の復興を見るまでは動かないつもりです。文化方面の復興にはいろいろ仕事をしています」と述べた[2]。彼が戦後に文化人としての当地の文化復興などに対して抱いた責任感と使命感を伝える内容となっている。

『ロビンソン』受容研究においては、主人公を「経済人」の典型人物として経済学を研究する角度、子供向けの孤島冒険小説としての翻訳児童文学領域、宗教性に関する解釈と教育的機能を持つものなど、様々に解釈されている。先行研究においては、『ロビンソン』の日本への翻訳に関する研究の多くは幕末・明治期の翻訳をめぐる。以下でそれらの研究をいくつか紹介したい[3]。

平川祐弘は研究において、まず幕末期の『ロビンソン』の二つの翻訳版である黒田麹廬訳（1848）と横山由清訳（1857）を取り上げてそれぞれの特徴を分析した。平川によると、横山は優れた和学者であるため、横山訳は黒田訳と違い、和文で訳された。平川は新島襄が黒田訳と横山訳からの一つを読んで海外渡航の夢と宗教への興味を持つようになる事例を取り上げ、多くの日本人が幼年時代に子ども向けに書き直された『ロビンソン』を読んで、特にこの小説の神の摂理との関係を注意していない事実と比較することで、『ロビンソン』における神の摂理の重要さを強調した。続いて、平川は夏目漱石の『ロビンソン』への評論と森鴎外の高橋五郎・加

藤教栄共訳（1911）への序を取り上げ、その小説の組立及び「孝」や「忠」の問題を検討した。このように、平川は翻訳テクストだけにとどまらず、関連の批評とコメントなどをも参考し、幕末・明治期の『ロビンソン』の翻訳の様相の一部分を明らかにした（平川祐弘、93）。また、猪狩友一は英文からの日本最初の全訳である井上勤訳（1883）を取り上げ、主人公の人間像、語りと宗教的物語構造の角度から、原作との比較をした。猪狩によると、井上訳は原作における孤立的な状況の下で自分の力で困難を乗り越えたその勤勉で勇敢なロビンソン像を受け継ぐが、クルーソーの宗教心に関すること、そのほとんどが削除されている。「天下国家を論じ悲憤慷慨するのでも、欧化主義者でも、国家有用の人材でもない魯敏孫は、近代化・一元化の流れの中で見失われていくある素朴な人間像を示している」と猪狩は井上訳におけるロビンソン像をこのように定義した（猪狩友一、38）。さらに、宇佐美毅も井上訳を考察した。しかしながら、宇佐美は井上訳だけでなく、山田正隆訳（1877）と高橋雄峰訳（1894）にも焦点を当て、小説の表現構造に着目し、これらの三つの翻訳版における話法構造の変遷を明らかにした。宇佐美によると、このような三人称から一人称への変化は当時一人称小説の伝統を持たない日本の文学にとって「格好の材料」となった（宇佐美毅、54）。高橋修も幕末·明治期における『ロビンソン』の翻訳版に関心を持っていた。彼はその時期においての多くの翻訳版におけるロビンソンの人間像を検討した。主にロビンソン像を立志と不孝の二つの方向から分析し、『ロビンソン』の「翻訳／加工をパフォーマティブな社会的行為と捉え直す興味深いモデル·ケースとなると思われるのである」とまとめた（高橋修、39）。

さらに、幕末・明治期以降の『ロビンソン』の日本への翻訳にまつわる研究というと、山本和平は 20 世紀の 50 年代から 60 年代にかけての『ロビンソン』をめぐる新解釈をあげた。例えば、資本主義の「文化英雄」、「生粋のイギリス人」と「熱を失った巡礼者」のようなロビンソンの人間像をまとめた。彼は『ロビンソン』の翻訳に関して、テクストを取り囲むコンテクスト、つまり訳者の意図および社会的歴史的環境だけでなく、読者の問題関心をも強調した（山本和平、15）。2013 年佐藤和哉は戦後間もなく出版された南洋一郎による『ロビンソン』の翻訳版（1950）を分析し、原作との比較だけでなく、1964 年に南のもう一つの筆名である池田宣政の名義で翻訳された「世界名作童話全集」版とも対比した。佐藤は、こうした戦後直後の 1950 年版から高度経済成長期に入った 1964 年版にかけての方向転換に対し、「より平和的な共存を指向するものとなる（中略）より年少の読者にわかりやすくするための工夫はそのままに、好戦的な拡張主義はなりを潜め、異人種との共生を目指すテクストに書き換えられた」とまとめた。加えて、1950 年版は「強く

時局に関わるいくつかの表現を除いて」、残りの部分は基本的に日中戦争のさなかに出版された南が初めて翻訳した『ロビンソン』の 1938 年版と同じであるという極めて重要な指摘もなされた（佐藤和哉、246）。さらに佐藤は 2014 年に訳者と解説者の『ロビンソン』へのコメントと解説などを研究対象として、戦後のそのような解説がどのように変化していくかを検討した。結論として、「『ロビンソン』を、クルーソーの知恵や努力、精勤を描いたテクストとする示しかたは、戦後から現代にいたるまで変わっていない」が、「程度の差こそあれ、このテクストのもつコロニアルな性格に対して読者の意識を喚起しようとする方向づけが 1980 年代後半から始まって」おり、「2000 年代にはそれ以外に、時間感覚や人間の生のアクチュアリティ、それにエコロジカルな関心などにも、再話者たちが読者の目を向けさせようとしていること、などを見ることができる」と述べている。このようにして、佐藤は『ロビンソン』が戦後において、児童書として解説され、紹介された様子の一端を概観した（佐藤和哉、49）。

上の先行研究から見ると、戦後 10 年間に出てきた『ロビンソン』の翻訳ブームという現象、そして翻訳児童文学としての『ロビンソン』を中心とした戦後日本における『ロビンソン』の受容およびその変容に関する研究がまだ不足であると言えるだろう。本稿はその不足の一部分を補うために、畑訳を取り上げ、原作との比較を通し、戦後日本における『ロビンソン』の受容の一例の様相を検討してみたい。

2. 畑耕一による『ロビンソン・クルーソー』の翻訳児童文学版の構成と前書き

一人称で書かれ、20 章から構成される畑訳は同年に出版された南洋一郎訳（昭和 25、1950）のように、ロビンソンが暴風雨にあう航海から書き始めるのではなく、原作と同じく「私は一六三二年、イギリスのヨークで生まれたのです。」（畑耕一、9）のところから始まる。畑訳は抄訳であるが、原作における無人島に漂着する以前の 4 回の航海経歴とその後の孤島での経験の発生手順は変更されておらず、時系列によって翻訳された。しかしながら、オリジナル版における島を離れて帰国した後の生活に関する内容は畑訳では省略された。

ここでまず畑訳のまえがきの部分を確認したい。簡潔にまとめると、主に三つの部分から構成される。作者のデフォーの経歴、時代の制約性という気持ちを持って『ロビンソン』原作を読む必要性、昔から今までその小説の大人気の原因が書かれている。ここで畑による世界中の少年たちに愛読される理由を以下に掲げる。

今日の世界中の少年は、この本を、むかしにかわらず愛読するのです。いや将来の少年からも、ながくながく、愛読されつづけるでしょう。

なぜ、そうなのかといえば、この本には、単に冒険の興味のほかに、人間が生きていくためにたいじな、正義、信念、勇気、忍耐、努力、そして神にたいする感謝、自分にたいする反省が、あらゆる場面に、つよく書きあらわされているからです。それは、いつ、いかなる少年も、まなばなければならないものだからです。（畑耕一、2）

上の引用に見るように、畑は少年たちが孤島冒険小説を好むと述べたほかに、ロビンソンという人物の身にある優れた品質は読者の少年たちに対して教育面の意義があるとも述べた。ここで注意しておきたいのは宗教性と関連し、畑はロビンソンの神に対する感謝の気持ちを大人気の原因の一つとして強調した点である。畑訳における宗教に関することはどのように再現されたのか、一切消されたのか、それとも何か変化されたところがあるのか、後に詳しく検討する。

3. 畑耕一による『ロビンソン・クルーソー』の翻訳児童文学版の特徴

3.1. ロビンソン像から見る特徴

畑訳における主人公のロビンソンの性格は原作と比べてより豊富な感情を持ち、人間味にあふれるようになった。ここで主に三つの方面から論じていく。まず、ロビンソンは猫、犬と鸚鵡などの動物により多くの感情を注ぐようになった。先住民のフライデーへの態度だけでなく、黒人の奴隷への態度も原作よりよくなった。憎悪の気持ちを持っているものの、時々人道主義の関心も見られる。最後にロビンソンという人物の愛と平和への憧れを強調させたのは原作に見られない。それも畑自身の願望と時代背景に呼応するのではないだろうか、後に詳しく検討する。

前述した第一点の動物との関係につきまして、まずロビンソンが難破船に行って残りのものを探す時に発見した動物についての場面は以下のようなものである。

私はひとりぼっちにはちがいありませんが、そうかといって、友だちがないわけではなかったのでした。それは二ぴきの猫と一ぴきの犬、そして一羽の鳥でした。みんな船の中で飼われていたものです。猫と鳥は、おもしろ半分、いかだに乗せて来たのです。犬は自分で泳いで来たのです。この犬はかしこくて、猟に出かける時、なかなか役にたちました。猫と鳥はいつも留守番をしてくれました。この四つの愛物は、ずいぶん私のさびしさを、なぐさめてくれました。

（畑耕一、42）

本稿において『ロビンソン』の原作を引用する際には、1967 年に出版された平井正穂訳を用いる。筆者が確認した限りでは、平井訳は翻訳版の中でも非常に忠実な翻訳が行われているためである。さらに、先行研究の中に、ほかの学者も平井訳を利用する例が多くあるため、日本における権威のある『ロビンソン』の翻訳版と言える。そのため、平井訳を取り上げる。上の畑訳における引用に対応する、平井訳の場面は次の通りである。

> とにかく二匹の猫は私が抱いてつれてきたが、犬のほうは第一回目の荷上げをした日の翌日、自分で海中に飛びこみ、泳いで陸地の私のところにやってきた。そのご永年にわたって私の忠実な僕となったのである。私は犬になにも獲物を喰わえてもってきてもらう必要もなかったし、仲間付合いをしてもらうつもりもなかった。ただこの犬に話しかけてほしかったのだが、それもしょせんは無駄な願いであった。（平井正穂、91）[4]

上のように、畑訳と原作を比較することで、もともとの二匹の猫と一匹の犬のほかに、畑訳では一羽の鳥も船にいることに書き換えられたことがわかる。原作の中でロビンソンが鳥を飼い馴らしたのに関連するのは、たくさんの鸚鵡の一羽を捉えて飼う別のエピソードである。彼がその鸚鵡に言葉を教えることに成功するまでにはかなり年月がかかった。「しまいにはいとも親しげに私の名前をよぶまでに仕込むことができた」（平井正穂、150）とロビンソンはそのように述べた。

そしてここで注意したいのはロビンソンのそれらの動物に対する態度の差異である。オリジナル版において、ロビンソンは犬と仲間付き合いをするつもりはないという態度を示し、飼う目的はただ一人の無人島での孤独生活で犬に話しかけたいというものである。犬が「私の忠実な僕となったのである」（平井正穂、91）という箇所も、ロビンソンの動物との上下従属関係を強調している。しかしながら、畑による翻訳版では、違うところがある。犬がロビンソンが外出する時に大変役に立つことについて、ロビンソンはその犬が賢いと讃え、原作のように自分の「僕」と見なすのではなく、友だちと見なすようになった。畑訳における「愛物」のような動物への呼称も原作より感情にあふれるロビンソン像を打ち立てたと言えるだろう。

さらに動物への感情の豊かさに関するもう一つの例を挙げる。夏季の雨が毎日降り続き、雨に濡れると体に悪いという原因で洞のような家で引き篭もる退屈な時期に、畑訳では、「じつにたいくつである。しかし、まあ、犬と猫がいるので、こい

つ等にからかったり、話しかけたりして、気をまぎらわせた」（畑耕一、60）とある。ここから、ロビンソンが動物との付き合いで気を晴らすことがわかる。それに対し、確認した原作の同じ場面にはそうしたロビンソンの動物への感情が見られない。

さらに、ロビンソンが無人島に漂着した間もなくのところに、食糧になる獲物とするために一匹の牝山羊を撃つエピソードがある。その牝山羊の子供の小山羊を家に連れて育てたが、飼い方の難しさと食物の不足で最終的には小山羊を殺して食べた。小説のそれ以降のプロットで、ロビンソンが谷間から家へ帰る途中に、再び山羊を飼いたいという思いが心中に浮かんだ。以下に畑訳のその場面を掲げる。

> この巡回の帰りに、私のかしこい犬はどこから小山羊を、生きながら、しかもきずつけないように注意して、口にくわえてきたのである。山羊は、元来従順な動物なのだが、この島のは野生だから、臆病でずるくて手にあわない。しかし小山羊なら、馴らすことができる。（中略）こうして、犬、猫、おうむ、小山羊という家族もでき、さびしさ、心ぼそさをまぎらしつつ、毎日生きるためにはたらいて、私はつぎの九月三十日をむかえた。（畑耕一、66-67）

対比するために、原作の対応箇所を引用しよう。

> この帰途、私の犬が仔山羊を急に襲っておさえつけるというちょっとした事件があった。私もすぐ走っていって取りおさえ、喰い殺されないうちに犬からその仔山羊を引き離した。できるならそれを家につれて帰ろうと思った。というのは、仔山羊を一匹か二匹に入れておいて、やがてはこれに仔を生ませ、一群の山羊を飼うというわけにはいかないものかというのが、私の久しいあいだの念願だったからである。それがもしできたら、火薬や弾がなくなっても私は喰べるのにこと欠く心配はなくなるのだった。（平井正穂、153）

畑訳と原作の異なる部分を二つの角度から検討してみたい。まずは原作と畑訳におけるロビンソンは小山羊を家につれて飼う共通の目的は、より多くの山羊を生ませ、食べ物のためにわざわざ外出して狩猟する必要はないようにするというものである。しかしながら、原作においてのロビンソンの感情の欠落と対照的なのは、畑による翻訳版でのロビンソンが山羊を飼う一番の目的は自分の感情のニーズを満たすことであるという点である。元から飼育していた犬、猫と鸚鵡のほかに、山羊をも自分の「家族」の一員として加えるような人間味にあふれるロビンソン像が表出された。さらにもう一つの方面から見れば、畑は犬がどのように小山羊に対応する

のかを書き換えた。オリジナル版の犬が山羊を襲うのと異なり、畑訳の犬は小山羊を傷つけないように優しく口に咥えて帰った。『ロビンソン』の日本への翻訳児童文学版で、南洋一郎訳のように、ロビンソンの動物に対する感情が深くなったのがほかの翻訳版にも見られるが、犬の性格も優しくなるのは珍しい。畑がわざわざ犬の性格をそのように書き換えたことはロビンソンの性格の変換と対応し、小説の多くの場合で見られる感情豊かなロビンソン像をよりはっきりと体現することができると言えるだろう。

以上でいくつかの例を挙げることで畑訳におけるロビンソンが原作と比べて動物に対し、より多くの愛情を注ぐという事実を指摘し、ロビンソンは感情が豊かな人物となっていることを検討した。次の部分でロビンソンの黒人の奴隷と先住民に対する態度を分析する。

先述した通り、ロビンソンは島に漂着する前に、全部で四回の航海経歴がある。その中の第四回の航海の目的は、知合いの商人や農園主がブラジルでのプランテーションの人手が足りないので、アフリカの奴隷を求めに行くのにロビンソンが同行するというものである。しかし、畑の翻案では、彼らの提案を初めて聞いたロビンソンは原作と異なる反応を示した。

> 私はことわろうとしました。黒んぼの奴隷だといっても、私たちとおなじ人間です。それをこんな遠いところまでつれて来て、牛か馬かのように、むちうってはたらかせることは、いかにもかわいそうです。私とても、一度奴隷にうられたことがあるので、彼等の気もちはよくわかるのです。――しかし、町の人は熱心に、私をときふせました。どうしても、ひきうけなければならないような、うまい言葉で攻めたてました。（中略）とうとう私は、承知したのでした。（畑耕一、27）

上記の引用から見ると、ロビンソンはアフリカから奴隷をこっそり運び込もうという知人の提案を初めて聞いた時に、自分自身が第三回の航海で海賊に捕らえられて奴隷にされた経歴を思い出し、奴隷の気持ちがよくわかるので、断ろうという態度を示した。畑訳のロビンソンは黒人も白人としての自分と同じく、地位が平等で、牛と馬のように扱われるべきではないと考えている。にもかかわらず、畑がまえがきに書いたように「原作の筋を忠実に辿る」（畑耕一、3）ことを目指していたために、畑訳でもロビンソンが奴隷売買提案を承知するという展開になっている。しかし、原作においては、奴隷への同情の気持ちは出てこないので、畑版におけるロビンソンの奴隷への同情という書き換えは、畑自身の人種や階級の問題に対する関心

を示すのではないだろうか。そして彼自身の経歴と照らし合わせれば、戦後間もなくの 1950 年（昭和 25）に『ロビンソン』を翻訳し、上のようなプロットの書き換えを行ったところに、畑の戦争がもたらした人種差別問題への興味と占領期の民主主義から受けた影響をうかがうことができるかもしれない。

黒人の奴隷への態度に関する書き換えがあるだけではなく、フライデーを含む先住民への考えも改変された。たとえば、ロビンソンがフライデーに隣の島でほかの国の白人種がどうして先住民に殺されなかったのかを聞き、その返答として、フライデーは「わたしたちは、戦争でとっつかまえた敵のとりこを殺すので、どんな国の人だって、わたしたちに刃向かって来ないものを、むやみに殺すものですか」（畑耕一、138）と答えた。その答えに対し、ロビンソンは「おそろしい野蛮人にも、それ相当の道徳はあるものだ」（畑耕一、138）と感嘆の念を示している。しかしながら、原作のロビンソンはそれを聞いた後にただ「彼らは自分たちと戦争をし、捕虜になった人間のほかは誰も餌食にはしない」（平井正穂、299）のように客観的に事実を述べた。そうした対比から、畑訳におけるロビンソンは先述したように先住民への態度が原作と比べてよくなった。憎悪の気持ちを持っているものの、時々人道主義への関心も見られる。

最後に第三点のロビンソンという人物の愛と平和への憧れを強調した場面を見てみたい。畑訳も多くの翻訳児童文学版と同じ、ロビンソンがイギリスに帰ったところで終わり、それ以降の物語を語らない。しかしながら、ロビンソンが長年住んでいる孤島から離れる場面につき、畑による翻訳版は以下のように書き換えられた。

> いよいよ出発の時、私は、島のなじみの人々をあつめました。そして、わかれの言葉をつづけました。さあみんなに、最後のおくりものとして、私は一冊の本をのこしておく。（中略）人が生きていく上に、愛こそすべてだということを、この本よりも高く深く教える本は、ほかにはない。みんな愛しあって、はたらいてください。そこには光があり力があり、希望があり生命があるのです。（中略）愛こそ平和のみなもとだ。（畑耕一、182-183）

聖書は愛と力がそこから吸収できるだけでなく、生命の希望をも発見できるものとして称揚される。そういう書き換えもまえがきの部分で、翻訳者が問いかけた、なぜ『ロビンソン』が少年に愛読されるのかという問題への答えと対応すると言える。まえがきで、畑はロビンソンの「神に対する感謝、自分に対する反省が、あらゆる場面に、つよく書きあらわされているからです」（畑耕一、2）と答え、ロビンソン像への宗教に関する解釈の角度から、『ロビンソン』を愛と平和の憧れを体現

した作品だとした。戦争のため原爆を受けた広島の文化人として、敗戦後5年目に『ロビンソン』を翻訳したときに、最後の別れの場面で原作にない愛と平和を願うプロットを加えたことからは、畑本人の戦争への憎悪と戦後に愛の力で復興を実現する願望をうかがうことができるのではないだろうか。

本節でロビンソン像をめぐり、三つの角度から畑訳のロビンソン像の特徴を検討した。そして次節で畑訳に物語がより論理的であるところを検討してみたい。

3.2. 物語の論理性から見る特徴

畑による翻訳版のもう一つの特徴は原作と比べると、物語の筋や流れがより論理的であるという点にある。そのため、畑訳は子供と青少年の読者により読みやすい翻訳版となっている。たとえば、ロビンソンが第二回の航海で出会った船長は彼に航海術を教え、先住民との交易のやりかたをも教えた。その航海を通してロビンソンは帆や舵を操ることができるようになり、また貿易でお金を儲けることもできるようになったのだ。しかし、その船長は亡くなった。原作にその原因が述べられていないのに対し、畑訳における船長はアフリカで病気にかかり、イギリスへかえる途中に死んでしまったと説明されている。

畑訳では、フライデーを先住民から救った後、ロビンソンはフライデーを家に連れ帰るが、まだ完全な信頼関係は築かれていない時期に、フライデーの住居を以下のように定めている。

> つぎに私は、フライデーのために、住居をさだめた。これはあの洞穴のそばに、テントをはっただけであるが、おそらく今までの彼の住居よりは、上等だったにちがいない。テントからは洞穴のなかに通ずる、ちいさな道がある。そこへは丈夫なドアをつくって、夜はしっかりしめ、彼が洞穴にはいることをゆるさなかった。彼の性質が善良であることは、およそわかってきたのだが、それでも食人種としてそだった彼である。めったにゆだんはできない。むろん剣や弓矢のような武器も、猟に出るとか、必要の場合とか以外には、とりあげておいた。（畑耕一、127）

上に見るように、ロビンソンはフライデーの性質が善良で、自分の身の安全を脅かさないのがわかっているが、相変わらず慎重に色々用心をした。その原因について、フライデーは食人種として安全を脅かす可能性があり、軽率でいい加減な態度を取ることはできないと、ロビンソンはそう解釈したからである。しかしながら、原作の同じ場面で、ロビンソンはただ彼がどのようにフライデーから自分を防備す

るかのみを述べ、防備が必要となる原因を解釈していなかった。このような対比も畑が『ロビンソン』を翻訳したときに物語の論理性を重視し、原作に論理性の足りないところを補足することで、読者により読みやすい翻訳版にしようとした意志をうかがうことができる。

3.3. 宗教的要素から見る特徴

畑訳における宗教に関する要素は原作と比較すると、大幅に減少された。それにもかかわらず、全部を消すのではなく、一部分を保留した。しかもその中に原作にないことを加えるところや原作への書き換えの部分もいくつかあるのである。デフォーは原作における序文で、次のように述べている。

> 事件を宗教的な効用にあてはめて述べられている。つまり、ここにある実例をとおして他の人々を教化し、われわれの境遇がどんなふうに変るにもせよ、そのあらゆる変化のうちにあって摂理の知恵をよしとし、また、たたえんがために述べられているのである。
>
> 編者は（引用者注：デフォーを指す）この話が事実の正しい記述であることを信じている。この中には虚構らしいものはまったくない。だが、こういった話は一気呵成に読まれるものであってみれば、読者の教化のためにも、また娯楽のためにも、この物語が事実にしろ虚構にしろ役にたつ分にはたいして変りはなかろうと思う。（平井正穂、7）

猪狩友一はこの序文に関して、以下のように述べている。

> デフォーはこの序文で、自らを「編者」（Editor）と呼び、「物語」（Story）があたかもロビンソン自身が書いたものであるかのように偽装しているのだが、その「編者」たる自分から見て、この「物語」は神の摂理をたたえる目的で述べられたものだというのである。この読者へのメッセージに、彼の宗教的な意図が明確に示されている。（猪狩友一、27-28）

原著に大きな紙幅を占めている宗教に関する要素を、デフォーはロビンソンの口を借りて読者に伝えた。デフォーは非国教会派の家庭の子としてロンドンで生まれた。当時のイギリスで、貴族と地主たちと保守的な王党派の間に紛争があり、宗教の面から言えば、英国国教会派と非国教界派との紛争があった（平井正穂、3-4）。そのため、デフォーは自分の宗教に関する考えなどを文学作品に投影した。

しかし、『ロビンソン』が児童文学版として日本へ翻訳された時に、オリジナル版の宗教に関する要素を変えないのは少なく、多くの翻訳版で、削減された部分を除くと、原作への書き換えと追加もある。本稿で取り扱う畑訳はどうであるのか、以下にまず物語の最初の部分を見てみたい。

> 私は一六三二年、イギリスのヨークでうまれたのです。そこはロンドンの北、約二百マイルにあるふるい都会で、大きなお寺や、歴史上いわれのある建物が、たくさんあるころです。（畑耕一、9）

畑訳の最初の部分でロビンソンは自分の故郷に大きな寺が数多くあると述べたが、それについては原著に見つけられない。原作で出身地のヨーク市が紹介された後、ロビンソンの父は外国からヨークに移住し、当地の出身者であるロビンソンの母との結婚及び家族のほかのメンバーである二人の兄の状況が述べられる。そのため、畑が原作にはない寺に関する記述を追加したことにはどういう目的があるのか。しかも寺と言えば、上の文章でもう検討した第二回の船長の死のプロットにも現れた。以下に掲げる。

> この船長は、（中略）アフリカで病気にかかり、イギリスへかえる途中、死んでしまいました。なみだながらに、私は彼のなきがらを、ロンドンのお寺へ、ほおむったのでした。（畑耕一、14）

このように、ロビンソンは船長が亡くなった後、以前に自分を助けてくれた船長を心尽くしてロンドンで寺に埋葬した。本稿 3.2 で確認したように、そのプロットは原作に現れない。ただ「船長が帰国早々亡くなったことはたいへんな痛手であった。」（平井正穂、30）と、ロビンソンの船長の死への悲しみの気持ちを示した。どのように船長の亡骸を処理するにも言及しない。そのため、畑訳がそうしたプロットを補足することも前に書いたように、物語の論理性をよりよくさせるためであろう。しかも、物語の最初に故郷に多くの寺があると述べるのも後文で船長の亡骸を葬るプロットへの伏線を敷くためのものであると言えるだろう。物語の筋をより流暢にさせたにとどまらず、感情に溢れる人間像の塑像にもたいへん役に立った。

そして本節の最後にさらに畑訳においての宗教的要素の書き換えの状況についてもう一つの例を補足したい。抄訳としての畑訳では、プロットを少数化したのに伴い、宗教に関することも大幅に消された。ここで残りの部分に一つの改作の例を挙げたい。ロビンソンは第二回の航海が成功して間もない頃に、第三回の航海を始め

た。その途中で海賊に捉えられてその海賊船長の奴隷となった。そこで二年間の生活をした後ついに逃走の機会を発見し、ジューリ[5]と一緒に逃れた。逃走の途中で彼らに援助の手をさし伸べたポルトガル船の船長がロビンソンにジューリを譲ってもらうことを願った。その場面で船長は「ジュリー（原文ママ）は、かしこい、かわいい少年だから、そばにおいて、仕込んでみたい。二年後には彼を奴隷の身分からのがれられるようにしてやるつもりだ。」（畑耕一、24）と言った。当該場面は、原作では以下のようになっている。

> 私がつれていた少年ジューリのほうにたいしても、六十枚のスペイン弗貨を払ってもよいとのことだったが、これは私としてはうけとりかねるお金であった。もちろん、船長になら彼を譲ってもよいとは思う。私が奴隷の身から自由の身になるときにあれほど忠実に協力してくれたこの少年の自由をお金で他人に売りはらうということは、なんとしても忍びないことであった。私がこういうわけを話すと、船長もいかにももっともなことだと認めてくれた。そして、それではもしジューリがキリスト教信者になるなら十年のちには自由の身にしてやるという一札を少年にあたえてはどうだろうか、という妥協案をもちだした。（平井正穂、51-52）

ジューリが自由が得られる条件として、原作で彼がキリスト教の信徒になるのが必要である。しかしながら、畑はそうした宗教に関することを削減し、ただ二年の時間が経った後にジューリは自由が得られると約束した。宗教的教訓物語である原作の『ロビンソン』にある濃い宗教性を弱めた。もちろん、全文を見れば、全ての宗教に関するプロットが上のように削減されたではなく、ただ一部分が消された。残りの部分に書き換えられたところもある。

4. 終わりに

以上のように、本稿は『ロビンソン』の戦後日本の翻訳児童文学版としての畑訳を取り上げ、その中のロビンソン像、物語の論理性や宗教的要素の三つの方面に着目しながら、原作のテクストとの比較を通じ、日本への『ロビンソン』の受容の一例の様相を検討した。子供と青少年の読者向けの翻訳版であるので、畑は抄訳の形式を選んだ。しかしながら、単に原作の一部分の内容を省略して残りの内容を変えないのではなく、原作にない要素を加えることやプロットを変えることが本稿に書いたように数多くあるのである。畑訳の書き換えの範囲は同年に翻訳されたもう一

つの代表的な翻訳版である南洋一郎訳の書き換えほど広くない。それにもかかわらず、戦後『ロビンソン』の翻訳ブームが現れた昭和 20 年代におけるその小説の受容状況の研究に、研究する価値のある翻訳版と言えるのではないだろうか。

注

1　『ロビンソン・クルーソー』の全三部の訳名は平井正穂訳に準ずる。彼は原作の第一部と第二部を翻訳し、それは上巻と下巻の形式で岩波文庫より出版された。第三部の訳名は彼による上巻のはしがきの部分に『ロビンソン・クルーソー反省録』として出てきた。本稿にそのまま使用する。

2　畑耕一が四宮美智子に宛てた葉書の内容は Web 広島文学資料室に公開された書簡類のら引用する。https://www.library.city.hiroshima.jp/hatakoichi/possession/index.html#c04（最終閲覧日 : 2022 年 9 月 13 日）

3　参考文献は、本文中では基本的に著者の名前と該当箇所のみ括弧内で示す。

4　平井正穂による『ロビンソン・クルーソー（上)』は原作の第一部への比較的に忠実な翻訳版であるので、本稿で原著を引用する時にその版を採用し、原作の現代語訳としている。

5　ジューリはロビンソンと一緒に海賊から逃れるが、ブラジルに着いた後にロビンソンにポルトガルの船長へ売られる。からこの名前の翻訳について、畑訳は「ジュリー」で、平井訳は「ジューリ」である。本稿で後者の翻訳を使用する。

参考文献

一次文献

Daniel Defoe. 1719; 2008. *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe*. The Novels of Daniel Defoe 1. Edited by W.R. Owens. London: Pickering& Chatto.

ダニエル・デフォー、畑耕一訳、『ロビンソン・クルーソー』、広島図書、1950 年。

ダニエル・デフォー、南洋一郎訳、『ロビンソン漂流記』、大日本雄弁会講談社、1950 年。

ダニエル・デフォー、平井正穂訳、『ロビンソン・クルーソー（上)』、岩波文庫、1967 年。

ダニエル・デフォー、平井正穂訳、『ロビンソン・クルーソー（下)』、岩波文庫、1967 年。

二次文献

猪狩友一、「『ロビンソン・クルーソー』の世界とその明治初期翻訳について　“Robinson”と「魯敏孫」の間」、『国語と国文学』、66 巻、1989 年。

宇佐美毅、「“Robinson Crusoe”の明治期翻訳をめぐって――表現構造が作り出す世界」、『国

語と国文学』、66 巻、1989 年。
私市保彦、『ネモ船長と青ひげ』、晶文社、1978 年。
佐藤和哉、「『ロビンソン・クルーソー』はいつ子どもの本となったか？――18 世紀イギリス出版史の一断面」、『東京外国語大学論集』、51 巻、1995 年。
佐藤和哉、「南洋一郎『ロビンソン漂流記』――戦後日本における受容のケース・スタディ」、『日本比較文化学会』、106 巻、2013 年。
佐藤和哉、「翻訳児童文学としての『ロビンソン・クルーソー』訳者・解説者はどう見てきたか」、日本女子大学英語英文学会』、49 巻、2014 年。
高橋修、「翻訳と加工――明治期のロビンソンナードをめぐって」、『日本文学協会』、55 巻、2006 年。
平川祐弘、「幕末・明治期の翻訳文学――『ロビンソン・クルーソー』と『十五少年』」、『現代詩手帖』、19 巻、1976 年。
山本和平、「翻訳と解釈――『ロビンソン・クルーソー』のばあい」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』、6 巻、1986 年。